書評

見田石介

『資本論の方法』

弘文堂，1963年7月，243ページ

『資本論』における抽象的なものから具体的なものへの叙述の展開が，そのまま社会のヨリ低い段階からヨリ高い段階への発展を示すものであり，したがって叙述の順序が歴史的発展の順序を示すという考えは，通俗的マルクス経済学においては普遍的なものといってよい。商品が生産価格を中心に売買されるようになる以前のある歴史上の1時期には，商品がその価値を中心に売買されると考えたエンゲルスにすでに，こうした通俗的な理解の萌芽があったとみることができよう。そしてこのような通俗性をもっとも露骨に集大成したものがソ連の『経済学教科書』であることは，周知のとおりである。事実抽象的なカテゴリー，ことに生産過程を捨象された単なる形態的なカテゴリーは，歴史上ヨリ広い範囲にあらわれるものであるから，こうした誤解が生じたのであるが，この誤解は資本主義の原理を明らかにする経済学原理論の意義を否定し，論理の展開を単なる歴史事象の羅列に解消させるものだといえる。

見田氏の新著『資本論の方法』は，以上の通俗的な理解を「論理＝歴史説」と名づけ，これを批判しながら，『資本論』の方法を明らかにしようとしたものである。その態度はきわめて真摯であり，行間にあふれる著者の真摯さは，読者の心を打たずにはいない。まことに労作というにあたいする著者である。ところがその真摯さ，その労苦が学問的に生かされているかどうかという点になると，必ずしもそうはいえない。原理論の展開が，歴史的前後関係をたちきって，抽象的なものから具体的なものへという論理的なものでなければならないとする著者の主張は，そのかぎりではまったく正しいのだが，そこに著者独自の見解がつけ加わる。その独自性はさまざまな点でさまざまな現われ方をしているにしても，一番かんじんな論理の出発点をとるならば，見田氏の主張は論理の出発点であるもっとも抽象的なカテゴリーは，超歴史的なカテゴリーと考えなければならないというのである。

その論拠はマルクスの『経済学批判』の「序説」であって，そこには科学的に正しい方法の出発点として，労働や欲望のような超歴史的なものがあげられている。しかも『資本論』冒頭の商品は，使用価値という超歴史的なカテゴリーまで分析され，そこから歴史的なものに上昇するようになっているではないか，というのである。「序説」にあげられている出発点としての抽象的カテゴリーは，労働，分業，欲望，交換価値であるが，このうちの分業はおそらく『国富論』を考えたうえでの技術的分業をさすものであろう。そうしてみると，分業，交換価値のような歴史的なものと，労働，欲望のような超歴史的なものとを無差別にならべたマルクスのやり方は，社会科学の方法を説くものとしては批判されなければならない。しかし見田氏はそれを批判するかわりに，それをぜんぶ超歴史的なものだと解釈する(p. 62上段)。交換価値をもって超歴史的とするのならば，資本主義の歴史性は完全に否定されることになろう。

しかも商品の使用価値はただの使用価値ではなく，特殊歴史的に規定された使用価値にほかならないと説く見解にたいして，見田氏はどういう理由から反対するか。いわく「たとえば商品である米が，ただの米でなく，米のほかになにか歴史的，社会的なものの混入されている米であるとしたら，そうした米はだれも消化することはできないだろう。」(p. 72)と。こうした批判で，相手が納得するものと見田氏が考えているのだとしたら，氏の経済学の理解の程度は，驚くばかりに浅薄なものといわなければならない。われわれが食べ，消化するのは「商品である米」ではない。「商品である米」の使用価値は，商品でなくなることによってしか実現されえないもの，したがって商品の使用価値はただの使用価値とちがって，他人のための使用価値であり，かつ価値の担い手である。

商品という形態の特殊歴史的性格についてもう少しよく考えていたら「商品である鉄がもしただの鉄でなく，超感性的なものを含有する鉄であるなら，そうした鉄で家を建て，機械をつくることはできないだろう。」(同頁)というような子供じみたことはいわなかったにちがいない。けんどもこれをいわなければ，超歴史なものから歴史的なものへという氏の主張は，根本からくずれることになってしまうのである。見田氏の真摯さはこの書の各所にあふれているのであるが，その主張を論証しなければならない一番たいせつなところにくると，とたんに真摯さは失なわれ，上にのべたような粗雑さがむきだしになる。これは，氏の真摯さにもかかわらず，その主張が科学的にまちがっていることの表現であろう。「論理＝歴史説」の誤謬は氏のいうとおりなのであるが，抽象的なものから具体的なものへという展開は，あくまで特殊

歴史的な資本主義における抽象的なものから具体的なものへの展開でなければならず，超歴史的なものはその論理の展開の結果として，消極的に明らかになるにすぎないのである。

見田氏の労作がどうしてこのような，いわば徒労にもひとしい結果になったのであろうか。むしろその理由の方がこの書が提出した，興味ある問題であると思われる。見田氏は自分の主張を根拠づけるのに，マルクスの文章をもってする。氏によれば『資本論』は一点非のうちどころのない完全なものであり，マルクスは不可謬な学者である。マルクスと同じなら理論的に正しく，それとちがえば理論的にまちがっている。こうしたマルクス神聖説は，見田氏のような戦前からのマルクス主義者の多くに特有なものなのであり，おそらく戦前の天皇神聖説の圧力のもとで，その影響を裏返しのかたちでうけて生じたものではないのだろうか。いわば天皇制の落し子としてマルクス経済学における天皇制的思考とよぶことができないであろうか。

マルクスは天才ではあったが神聖にして侵すべからざるものではなかった。『経済学批判』の「序説」をかいたときから『資本論』をかくまで，学者として成長しているのであって，「序説」が『資本論』にくらべて科学的に低い水準にあるのは当然のことである。『資本論』にしても，完全なものであるどころか，われわれに残されたものは未完の大著にすぎない。だからある主張をしようと思えば，たいがいの場合尨大なマルクスの文献からそれを裏付ける引用が可能であろうし，それに反対しようとしてもそれを裏付ける引用が同じように可能であろう。こうして他人の引用を批判するときは，相互に，例えば「こうした断片的な言葉をとり出してくることは，全体の関連をはなれた恣意的な引用だといわねばなるまい。」(p. 237, 下段) といいあうことになるのであろうが，引用などというものはいずれ断片的なもの以外ではけっしてありえないのである。

こうした傾向は，はては翻訳の問題にまでいきつかざるをえない。従来「二者闘争的」と訳されてきた "zweischlächtig" という言葉は，そうではなしに「混種の」と訳されなければならないという (p. 75)。そうであるかもしれないが，マルクスの文章をどう訳すべきがという問題と，われわれが価値と使用価値との関係をどう考えるべきかという問題とは，まったく別の問題である。ところが見田氏，もしくは氏を1例とするところの天皇制的マルクス経済学者にとってはその区別がない。「二者闘争的」と訳されてきたために価値と使用価値とは二者闘争的な関係をもつのだと信じられてきたが，「混種の」訳されなければならないから，したがってわれわれも価値と使用価値とは混種の関係だと考えなければならない，というわけだ。かの有名なる山田勝次郎氏の「不当な社会的価値」説(もっともこの方は語学的にもあまり信用できないが)と同じ発想が，ここにも再生されているわけである。

ところが自分の見解にどうしても都合のわるい文章が，同じ神聖さをわけ与えられたレーニンや毛沢東にみられたらどういうことになるか。例えば見田氏はこういうのである。「このことは，レーニンや毛沢東の現実的対立の深い把握になんらか本質的な影響を与えているわけでもなければ，——これこそかれの分析的方法の力である——またマルクス，エンゲルス以後に弁証法的唯物論を創造的に発展させたこれら2人の哲学的業績を傷つけるものではないが，より正確にされねばならぬことだろう。」(p. 168)。このもってまわったいい方は見田氏だけのものではない。天皇制的マルクス経済学者の思考様式の核心をあらわす基本的なパターンだといってよい。そして見田氏の『資本論の方法』という労作の悲劇性ないし喜劇性は，このパターンから脱することのできない点にあると考えられよう。

それにしても，天皇制的思考様式にもかかわらず，ソの連『経済学教科書』の「論理＝歴史説」を批判しえたことは評価されなければならない。さらにこの真摯な学究が，天皇制的思考様式から真に解放されることができるとしたら経済学上の実のある業績をうみだすであろうことは，疑問の余地があるまい。残念なことにそれができなかったために，見田氏の真摯さは空転した。あえて『資本論の方法』のために費された著者の労苦を徒労とよぶゆえんである。　　［日高　普］

経済企画庁経済研究所

『資本ストックと経済成長』

研究シリーズ第11号，昭和37年10月，209ページ

本書は，経済企画庁経済研究所の資本蓄積ユニットの研究スタッフ(主として赤羽隆夫氏の作業が中心と聞いている)によって，年余にわたる作業の結果をまとめられた力作である。「はしがき」をはじめ，本書の随所に示されているように，研究の主たる目的は「資本ストックの試算を行なって，わが国戦後のめざましい経済成長